

俺はかめはめ波（攻撃）
を諦めない！

さわZ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは大英雄を目指す男の物語

目次

| | | |
|------|----------------|----|
| 序章 | 大英雄の背中 は遠い | 1 |
| 第一話 | 幼馴染が何か変 | 5 |
| 第二話 | ひさつわざがひさつわざ | 8 |
| 第三話 | 撃てば命の泉が湧く | 11 |
| 第四話 | かめはめ波の正しい使用方法 | 14 |
| 第五話 | 私、脱いだら凄いです。 | 19 |
| 第六話 | おつきくなつちやつた(泣) | 23 |
| 第七話 | 猪の丸焼きゴブリンのミンチを | |
| | 添えて | 28 |
| 第八話 | ただし、尻から刺さる | 32 |
| 第九話 | 大英雄の背中を見ることが出来 | 35 |
| 第十話 | 賢者サトウの復活 | 41 |
| 第十一話 | それは閃光のように | 47 |
| 第十二話 | 赤く染まった校庭。 | 52 |
| 第十三話 | 出すなど言われたものほど出 | 57 |
| | したくなる。 | |

序章 大英雄の背中は遠い

輪廻転生という事象がある。

別にトラツクに轆かれただけの神を名乗る存在のミスや道楽で死んだわけでもない。

ただ自我が目覚めた時、自分の前世を思い出した。

前世の親の顔は思い出せなかったが、ただ後悔だけがあった。ああすれば良かった、どうしてやらなかったのか。何をしなかったのか。すれば良かったのかも思い出せなかった。ただ後悔。その一念と、それに光を灯す大英雄の存在を思い出した。

少年は思い出してから直ぐに体を鍛えた。字を覚えた。

そして、自分の生きている世界観を知った。

ここは剣と魔法を使い、人と魔物が争う世界だということを知った。

全ては大英雄に少しでも近づくと為に。

体を鍛えたのもそうだが魔法という存在。それはあらゆる生物が皆持っている魔力を練り上げて摩訶不思議な現象を起こす。何も無い所から火を出したり水を出す。

これには属性があり火に関係する魔法を使う者は火に関係する魔法しか使えない。属性は選べるらしく火に水。風に土。稀に光や闇とあるがまたの機会にしておこう。

少年は敢えてどの系統にも染まらない。無属性。出来ることは身体強化だけの魔法。しかもそれはどの属性でも使える共通魔法に分類される。

火属性が使えば手足に火を纏い目標を焼く。

水属性なら負傷した患部を癒す。

風属性なら文字通り風のように移動が出来る。

土属性なら岩のように体が固くなる。

だが、少年はどれも選ばない。

何故なら大英雄は自身を鍛えに鍛えぬいた、まさに無属性の頂点だから。

周りの者からも何でもいから属性契約しなさいと言われたが少年は頑なに身体強

化魔法。それ以上に己の体を鍛えた。

そして、自己流修行を始めて五年で遂に少年は大英雄の技の一つを会得した。

魔法を知り、応用の未出来た技だから純粋に会得したとは言いがたい。だが、形には成った。

そして、翌日に控えた魔法学園への入学前の修行修めする。

イメージするのは最強の大英雄。

「かゝ」

体内の中にある魔力を増幅させながら独特の構えをする。

「め〜」

右の腰に両手持っていき、魔力と共に《気合い》を込める。

「は〜」

花が咲いたように開かれた手の平には蒼白く輝く光球が生まれていた。

「め〜」

魔力と気合い。

その限界まで込められた光の球は真つ昼間の森の中でもう一つの太陽が生まれたかのようにも思えた。

「波—————!!」

光の球を押し出すように腕を前に突き出すと光の球から白い光線が撃ち出された。

それは目標にしていた苔が生えた大岩を覆いし、その後ろにあった木々をもその光の中に飲み込んだ。

そして、光が晴れたその先には・・・

目標としていた大岩を土台に色とりどりの花が咲き乱れていた。

更にはその後ろにあった木々には季節外れの果実が実り、更にはその射線上を偶然通りかかった猟師のおじいさんの肩こりが治っていた。

そりゃ、身体強化の魔法を撃ち出せば撃たれた生物は活力に満ち溢れるだろう。

「違う、そうじゃない」

大英雄の背中は遠い。と、感じる少年だった。

第一話 幼馴染が何か変

私の名前はコレット。コレット・アルマーニ。

一応、アルマーニ村の村長の次女で今日から幼馴染みの男の子と共に王都の魔法学園に入学する。

アルマーニ村は西側に小さな山があり、南と西側に穀物を育てる畑があり、北側に門を構え、村の周りをぐるりと囲むように柵が立てられている、人口は200人程が住んでいる小さな村。なのでたった二人だけの出発とはいえ村の殆どの人達が見送りに来てくれる。

体に気を付けるんだよ。とか、いつでも帰ってきてもいいからね。と、優しい言葉かけられるなかで、私と一緒に入学するはずの男の子には《必ず》帰ってこい。と命令に近い言葉が送られた。

それもそのはず。私の幼馴染。アルフはこの村一番の働き者だからだ。

本人は「これも修行の一環だ」と、2年前まではただの荒地だった所を素手で開墾して、農業に貢献した。

一年前には畑を荒らす角ウサギと猪を素手で仕留めてきた。ここまですら村にいる

大人達にもできるが、それ以上の事をやらかした。

昨日、オリジナルの魔法で獵師のおじいさんの肩こりを治していた。

水系統のヒールという回復魔法ならまだ肩こりを治す事ができるが、お肌がピチピチになるといふ追加効果までは難しい。

それを聞いた村の女性達がこぞつて魔法を受けに来た。

「これは攻撃魔法なんだぞっ」と、涙目でオリジナル魔法をぶっぱなす。

「かめはめ波っ!」

奥様方の肌の艶が上がった。

「かめはめ波ーっ!」

男性陣の薄毛、水虫が治った。

「か〜め〜は〜め〜ぶるうううああああっ!!」

村の畑の稲穂がたわわに実った。

アルフは泣いた。その分村人達は喜んだ。彼がこの村にいただけで村の収入は倍になるのだから。

というか、彼が開墾した畑の管理も彼がやっていたので学園にいつている間は大人達が管理するが、先ほどの魔法があれば更に収入が上がる。

村長であるおじいちゃんに彼を誰にも渡すなよ。と、念を押された。べ、別にアルフ

のことなんか好きじゃないけどそこまで言うなら仕方ないな。なに、おじいちゃん、その「仕方ないな」という顔は？

変に落ち込んでいるアルフの腕を取って、馬車に乗り込んだ私たちは村人達に見送られ王都へと向かうのであった。

「君は優秀な水魔法使いになれるよ」

「どちらかと言えば武術家に成りたいんだけど・・・」

「え？」

「え？」

王都から迎えに来た行者さんの言葉に返事したアルフの言葉に疑問符を浮かべる私達の態度にアルフはまたさめざめと涙を流すのでした。

第二話 ひさつわざがひさつわざ

私はしがないアポロ王都の派遣隊員。今回の任務はアルマーニ村という王都から馬車で一週間かけて二人の魔法使い候補の子どもを迎えに来た。

アポロ王都の保護下にあるアルマーニ村の村長から魔法使いにしてほしい子どもがいるという報告があり出向いたのだが、なるほどなかなか素質がある子どもも達だ。

村長の娘のコレットは既に水魔法を習得しており、道中の飲み水に困ることはなさそうだ。アポロ王都は火の大精霊を主としているが、格が落ちるが水を含めた他の中級精霊がいるのでそこで再契約をすれば中の上クラスの魔法使いになれるだろう。

アルフという少年は武術家を目指していると言うだけあって夜中の道中に現れたゴブリン達の撃退に一番に貢献した。

ゴブリンは人間の子どものくらの大ききのモンスターで家畜や老人、子どもにも害をなす存在で、油断したら我々派遣隊員もやられる可能性がある。

そんなゴブリンの襲撃に何故か馬車の中で寝ていたアルフは突如目を覚まし撃退に出た。

毎朝アルマーニ村の周りを背中に土を積めた壊れた鍋担いで走っているなかでゴブ

リンだけでなく角ウサギに猪。ジャイアントバタフライといった魔物を討伐してきた。彼いわく「気配を感じた」とのこと。本来それは風魔法に順するものだが彼は未だに未契約らしい。

自分達に向ける敵意に敏感なアルフは襲いかかってきたゴブリン達の出鼻をドロップキックでくじきながら敵襲だと我々派遣隊に檄を飛ばす。

子どもばかりに働かせてなるものかと、見張りをしていた隊員や仮眠をとっていた私も加わってゴブリン退治をしていく。

夜間での襲撃もあつたが松明の灯りだけでなく、辺りを明るくする光魔法のライトで辺りを照らすとすでにアルフ少年の足元には三体のゴブリンが転がっていた。まだ息があつたゴブリンの様子を見たアルフは瀕死だつたゴブリンの首の骨を踏み砕いてとどめをさす。それを見た仲間のゴブリンが手にした石の斧や錆びたナイフでアルフに襲いかかるが、石の斧は手のひらで。ナイフは親指人差し指、中指の3本で挟むように受け止めるだけでなくなると身体強化の魔法でブーストした身体能力でそのまま奪い取り、返すように襲いかかってきたゴブリンの首に突き返した。

鮮やかすぎる手並みに派遣隊の面々は驚きを隠せなかった。それは襲撃してきたゴブリン達もそうだった。

そんなゴブリン達の中で一番体の大きいゴブリン。ホブゴブリンも驚いているな

かでアルフは勝負に出たのか、あの構えをする。

「かゝめゝはゝめゝ」

て、ちよつと待て。その魔法は?!

「波————つ!!」

アルマーニ村へ向かった派遣隊記録簿。

その中にゴブリンの襲撃があつたとあるが、その中に突然変異したゴブリンの進化系リトルオーガが現れて、アルマーニ村の少年アルフが責任もつて三時間にわたる激闘の末討伐したと記される。

何で少年が責任を取るの?と疑問に思えただが、少年のせいで突然変異したんだから仕方ないんだ。

第三話 撃てば命の泉が湧く

「この先にある村で少しばかり補給作業を行います。」

王都から派遣隊員の言葉にアルフは肩身を狭くする。

深夜にあったゴブリンの襲撃と2つの意味で突然変異したゴブリンの進化系リトルオーガへの対処で派遣隊の物資の消費が無視できないほど出たからだ。

本来ならゴ布林退治だけだったのにリトルオーガというイレギュラーで灯りに使った松明に援護に放った弓矢。怪我人が数人出たので傷薬の補充など物資の半分が昨晩の内いきえた。本来、リトルオーガと遭遇すれば物資の半分どころか派遣隊の全滅すらあったが幼少期から亀仙流もどきの修行をしてきたアルフに身体強化の魔法が加わることで物資の半分で済んだのだがリトルオーガの原因もアルフなので彼が肩身を狭くするのも仕方ない。

そんなことで立ち寄った村は余りにも寂れていた。

人だかりが殆どなく、村の真ん中にある井戸には木の板と釘で蓋がされている。

何かあったのかと最寄りの宿に入りながら話しをしつつ食事でもしようとなんとコップ一杯の水さえ有料となっていた。

聞けば数日前にゴブリンの群れが村を襲撃した。何とか撃退はしたもののゴブリンの一匹が村の井戸の中に落ちて井戸の水が使えなくなることになったのが原因だ。

ゴブリンは基本的な衛生な生き物であり病原菌の固まりとまで揶揄されている。その為、アルフはリトルオーガとの殴り合いを制した後、問答無用でコレットのウォータートルネード。魔法的洗濯機で全身を隈無くきれいにされた。

派遣隊員やコレットがこの村に残って水を供給させるかと考えたが、それでは自分達もこの場留まり続けることになる。この村の村長も今来ている自分達。派遣隊に新しい井戸の建設を王都に打診してもらおうつもりらしく自分達は尚更ここには留まらない。だが派遣隊やコレットの水魔法で新しい井戸が出来るまでの水を溜めるには圧倒的に水の容量が足りない。少なくともこの村の畑は全滅し、最悪死人が出るかもしれない。

そんな中、コレットがポツリと呟いた。

「量がなければ質を上げればいいじゃない」

と、

アルフは納得ができなかった。かめはめ波は攻撃用であり断じて回復魔法ではないのだと。だがしかし、コレットの魔法で作り出した水にかなり弱めのかめはめ波をぶつけたら、その水はキラキラと輝き、まるで聖水の如く力強さを感じさせた。

試しにアルフが飲んでみるとなんか元気になった気がした。次に弱っている村人に

も与えると元気になった。

ここまで実験したから大丈夫。という訳で枯れ果てる寸前の畑の真ん中に立たされるアルフ。

もうじき自分の頭上にコレットや派遣隊。村の水魔法使いが放つ水球が落ちてくるだろう。その水球をかめはめ波で粉碎。その水しぶきで畑も回復させようということになった。だがそれを裏切るつもりでかめはめ波を撃つ。アルフはいつも以上に気合い込める。

そして、彼の頭上に次々と撃ち出される。それらを迎撃するために構える。

「か、め、は、め、波ーっ!!」

その日、その村、その畑で奇跡の雨が降り、その雨に濡れた畑と村人達に活力を与えた。その事に涙を流す、コレットと派遣隊員。そしてアルフの姿があった。

第四話 かめはめ波の正しい使用方法

王都アポロは多くの魔法使いを輩出している一種の学園都市である。特に火の魔法使いが多く輩出されているのには訳がある。

王都アポロの名称になった200年前に勇者アポロと火の大精霊イフリートが契約し、悪魔や怪物を打ち倒し建国された国の名が勇者アポロからきている。また、その勇者アポロと契約した火の大精霊が今でもこの地に留まり王都の人々を見守っている。と、派遣隊員から聴かされたアルフ達は興味津々で勇者アポロと火の大精霊イフリートの冒険譚を聴いていた。

コレットは勇者と後に結ばれる王女との話に。アルフは勇者がいかにして強くなったのかを聴いていた。だが話を聴き終えた二人の表情は正反対。コレットはニコニコしているのにアルフはしかめっ面をしていた。

火の大精霊イフリートと契約して強大な力を手にいれたというのが気に入らないのだ。彼としてはその大精霊と共に切磋琢磨しあい互いの実力を高め合う。それを期待していたのに「勇者は大精霊と契約して魔物を倒しました」という、出会い。勝利。の流れが気に入らないのだ。

素質があり、才能があつたから勝つたではなく、努力、友情、勝利の三本柱。落ちこぼれでも努力すればエリートを越えられる。自分の想う大英雄はそんな人物だから。

勇者アポロは神の子だとか実は亡国の王子だったという説もある。それでも勇者と呼ばれるまでたゆまぬ努力してきたんだと無理矢理納得したアルフだったが、その10分後。その勇者の血縁者だという貴族とその護衛に対して大立ち回りをしていた。

何でこうなつた。と、ため息をつく派遣隊員達。

事の発端は王都アポロの立派な城壁に目を輝かせていたコレットとアルフが城門前で順番待ちをしている商団や自分達と同じように魔法使いの卵達を連れてきた一団が城門を通る手続きをしていると一際派手な装飾をした馬車がアルフ達の乗っている馬車に割り込みをしてきた。

その特、派手な馬車とアルフ達の乗っている馬車がぶつかり、その衝撃で比較的体重の軽いコレットが外に投げ出された。とつきにアルフも飛び出しコレットを抱き止めながら地面に叩きつけられる。それが城門前で順番待ちをしているという事と合わせる状況はかなり危険だ。

まず柔らかい土の上ではなく舗装された石畳に叩きつけられる。他の馬車の下敷きになるといふ物理的な危険性。そして、順番待ちをしている馬車の馬糞の上に落ちるといふ衛生面での危険性だ。

アルフはそれを知ってか知らずか、どちらにせよ《後悔のない行動》をとるためにコレットを抱き止めながら背中から地面に叩きつけられた。背中に生温い感触を感じながら。

コレットの無事を確認しながら服を脱いでいたら、ふいにぶつかって来た馬車の乗員。自分と同じくらいの少年がいやらしい顔で笑っていた。まるでこちらを嘲笑うかのように。

それを見たアルフはまた《後悔のない行動》にうつる。

身体強化の魔法で道端に落ちていた石を蹴り飛ばして自分達にぶつかって来た馬車の車輪の支軸をへし折った。

アルフの身体強化の魔法があればその辺に落ちている石もライフルの銃弾のように撃ち出す事が可能となる。

車輪の支軸をへし折られバランスを崩しながら倒れた馬車から先程自分達を笑っていた少年が転がり落ちてきた。馬糞の上に。頭から。

それを見たアルフは自分がされたように相手を笑った。その間にコレットはアルフの服を脱がせ、水魔法で綺麗に洗っていた。

自分が笑っていた相手に笑われる。はつきり言って自業自得だがアルフに笑われた少年は怒り狂い、自分の護衛隊員にアルフを痛めつけろと命令を出す。貴族たる自分を

笑う不敬な輩を痛め付けねば気がすまないらしい。

アルフ達を連れてきた派遣隊員が止める間もなくアルフ対貴族の護衛隊員の乱闘が始まる。だが、相手と場所が悪かった。

護衛隊員の武器は鎧の上から、槍や剣もしくは魔法だがそれらを振り回すには狭すぎる城門前。更に回りには無関係の人達や馬車があるために十分に力を発揮できない。対してアルフは素手で猪を仕留めることが出来るだけ打撃力と機動力で相手を翻弄していく。

それに業を煮やした貴族の少年が火の魔法ファイヤーボールを放つ。バスケットボール程の大きさの火の玉は周りの事を一切考えない、護衛隊員の事も考えていないだろう一撃にアルフは護衛隊員を掻い潜り、ファイヤーボールの最前に立つと同時に身体強化魔法を全開開放しながら腕を交差させる。そして、ファイヤーボールが着弾、炎上。そのままアルフが焼かれるかと思った瞬間彼を中心に一陣の風がその炎を吹き飛ばした。

貴族少年がしでかしたことも信じられないが、一人焼き殺せる炎を身体強化の魔法の余波で吹き飛ばしたアルフも信じられなかった。コレットすらも驚いていた。まさか、ここまで自分の幼なじみが身体強化の魔法を極めていたなんて思いもしなかったのだろう。

そして最後にアルフはあの構えをする。

「かゝめゝ」

それは彼の持つ最高の技。

アルフの魔力と気合いが手の平に集まる。

「はゝめゝ」

それは身体強化魔法の頂点。

目の前の障害を打ち砕かんとする光の奔流。

「波——っ!!」

アルフが撃ち出したかめはめ波は貴族少年の馬車の天井すれすれを通過して遙か彼方に浮かぶ雲を突き破って穴を開けた。

その光景を見た貴族少年と護衛隊員は震え上がった。あんなものを喰らったらどうなるか分かったものじゃない。そう考えている彼らにアルフはこう言った。

「次は当てる」と、

第五話 私、脱いたら凄いです。

「こちらが例の少年が殴り付けた鎧になります」

王都アポロにあるフレイム中等部学園に設けられた会議室の中央に置かれた鎧は、胸部装甲の部分がまるでハンマーで殴られたように大きな凹みがあった。

「この鎧は貴族。しかも勇者アポロの末席貴族の護衛隊員の物であろう？最低でも四等級。それを強化魔法込みでとはいえ素手で凹ませた？本当に魔法使い志望なの其奴？」

あの喧嘩からアルフ達を中等部学園の寮に送り届けたあと、派遣隊員達は中等部学園の重役達にすぐ話を取り次いでもらうことにしてもらった。

アルフにファイヤーボールを放った少年は傷害の容疑で自警団の取り調べを受けている。城門前での出来事なので言い逃れが出来ない彼等は今頃こつてり絞られているだろう。アルフも脅しのもりとはいえ、強大な力を感じさせる魔法。かめはめ波を放ったが一直線にしか進まないその軌道から傷付けるつもりはないと判断されコレットと共にフレイム中等部学園の寮で待つように言いつけられている。

そして今回の議題がアルフが殴り付けた鎧になる。

鎧の強度にはランク付けがあり、勇者アポロが身に纏った炎帝の鎧。現国王もしくは

王子が戦闘時に纏う国宝級の史上最高の性能を持った鎧や他国の国宝とされているローブを頂点に、將軍や参謀が身に纏う物を一等級。

将校や凄腕の冒険者が身に付けているのが二等級。

王都の精鋭部隊や有力貴族。その護衛騎士団が身に付けているのが三等級。

少しばかりお金をかけたりして市場にあまり出回らない性能がいい鎧が四等級。

新兵や中級クラスの人間が身に纏うのが五等級。

その中古や練習用の模擬刀や鎧が六等級。

更に粗悪な物は七等級になる。

ちようど真ん中のクラスの鎧を素手で凹ませた。そいつは土精霊と契約していてもおかしくない。だが未だに無属性である。

「其奴は闘士ヘクレスの末裔とか？」

闘士ヘクレスは勇者アポロと同時期に活躍した格闘家で土の大精霊ノームと契約したという伝説が他国には存在する。

土の大精霊ノームと契約したヘクレスはその豪腕でドラゴンの首もへし折ったという逸話がある。

「いいえ。彼はアルマーニという村で育った一般人の少年です。ただ・・・」

「ただ・・・。なんじゃ？」

「彼は幼少期。それも五歳位から体を急に鍛え始め、魔法の勉強。身体強化魔法を徹底的に鍛えたそうです。魔力切れで倒れるまでほぼ毎日」

「魔力切れで倒れるまでだ?!?そんなことをすれば数日間は魔法が使えなくなるぞ!」

魔法使いの魔力は一日のうちで1/3から半分は回復するがすべてを使いきると体は動かせるが再び魔法を使うまでにかかる時間は数日から一週間近くかかる。これは魔法使いにとっては致命的。魔法が使えない魔法使いになんの得があるというのか。

そんな時ですらも、いやだからこそアルフは体を鍛えることをやめなかつた。

彼等は未だに知らないが魔力も筋肉と同じように酷使して休ませるとその量が微々たる程度だけが増える。更にはコレットの存在が後押しする。

最初は家事で疲れていた母親の役に立つ為に疲労が少しだけ軽くなるプチヒールを王都アポロの巡回隊員の一人と契約していた水精霊と仮契約をして覚えたのだが毎日魔力切れか体力切れで倒れる寸前のお隣さんの子供に使うことにより肉体的疲労の回復の期間が短縮。更に雀の涙よりも少ないが魔力も回復する。

よってアルフの肉体と魔力は日々強化される。おかげでアルフの体脂肪率は常に一桁台である上に数年間積み重ねてきた魔力総量も半端じゃない。

「それに彼が使う魔法ですが宮廷魔術師までとはいいませんがかなりの(回復)魔力を持っています。他国に渡すには余りも惜しい逸材です」

「何?!そこまでの(破壊)魔力なのか!?!いや、雲を突き破ったという報告があった。あれが本当なら・・・」

それから話はトントン拍子で進み、アルフは形式上は軽い試験を受けることになるが合格が確定した出来レースになることは確実になった。

第六話 おつきくなつちやつた（泣）

王都アポロにある中で最も難関と言われているフレイム中等部学園の教室で筆記テストを受けたアルフとコレットは試験終了と同時にため息をつきながらすテストを受けていた机の上にへたれこんだ。

簡単な読み書きと算術。掛け算、割り算の問題は難なくクリアできたが問題が中盤になると王都アポロ建国からの歴代国王と行ってきた政策について答えよという問題で二人は行き詰まった。

そもそも二人がいたアルマーニ村は田舎村だ。字の読み書くが出来るのは人口の半分。更に書物といった物を所持しているのはコレットの祖父。村長ぐらいだ。

その村長が持つ書物の中に政治に関するものはなかった。二人が解けたのは初代国王のアポロと現国王ホームラ王の名前だけだった。アルフはここに来て早速後悔してしまいが、次の実技試験に向けて気合いを入れ直す。

そもそも自分達のような平民に政治学関連は期待していない。派遣隊員達の中には魔力の強さを見ただけで何となくわかってしまう。その為、派遣隊員に認められさえすればよほど悪い結果が出ない限り不合格はあり得ない。その点を踏まえると二人とも

及第点は取れただろう。

問題は実技試験だろう。コレットは日常、生活習慣のように水魔法を使っているから問題はないだろうがアルフは無属性の身体強化魔法のみで評価してもらわねばならない。

かめはめ波を披露したいが生憎実技試験に使われる物は学園内にいる火、水、土、風の中級・下級精霊が作り出した物への対処で評価される。火の魔法を評価してもらいたいのなら土の精霊に的を作り出してもらい、それを焼く。その威力は精霊達に伝わりそれによって評価される。そんな物にかめはめ波をぶつけたらどうなるか分かったものじゃない。

ちなみに卒業する時にその精霊に気に入られれば仮契約してもらうことが出来、魔法使いとしてのランクがあがる。更に本格的に気に入られれば賢者として国直属の魔法使いエリートとして扱われる。が、コレットは自分の村に戻って村に貢献したい思いがあり、アルフは身体強化魔法のみを極めようと考えているので精霊に気に入られようとは考えていなかった。のだが、

「この子かな？少し前に感じた魔力の人間は？」

「たぶんそうだよ。だって透明に近い魔力だよ」

「食べてみたいね」

「白？青？でも透明」

「「とつてもとつても美味しそう」」

「何この物騒なことを言う小人！殴ってもいい?！」

試験会場となる屋外の演習場に来たアルフの回りに空を飛ぶ小人達が演習場の奥から飛んでくるとアルフの回りをぐるぐると旋回しながらなにやら物騒なことを言い出した。思わず握りこぶしを振り上げようとしたアルフを試験監督が慌てて止める。

「いや、駄目だよ！この子達がこの学園にいる数少ない精霊なんだから！」

よく見ればこの小人の髪や目が普通じゃない。というか宙に浮かんでいる時点で普通じゃないが。

火の精霊らしき小人は赤い服と帽子。炎のように赤い目と毛先が蠟燭のようにチロチロと燃えている。

水の精霊らしき小人は水色の服と帽子。細目で全体的にゆったりとした感じの小人。土の精霊らしき小人は茶色の服と帽子。他の小人に比べてややぽっちゃりな小人。

風の精霊らしき小人は、緑の服と帽子。一番活発的でアルフの回りを他の精霊よりも多く回っている。

「この子達は四属性の下級精霊でね。今年生まれただけりなんだ。だから君みたいにこれからの属性も選べる無属性の魔力に興味があるようだ。精霊と契約するというこ

とは彼らに魔力を与え、対価として強力な魔法が使えるんだよ」

「ここに来る人達は皆何色かに染まってる」

「私達は同じ色しか食べられない」

「だから君の魔力は美味しそう。白くて透明。しかも大きい。誰でも食べれそう」

「だから食べていい？」

精霊達から見ればアルフの魔力はご馳走見えるらしい。これにはアルフも困った。魔力を与える。というか放出するのはかめはめ波以外あるとしたら身体強化の魔法を全開開放した余波しかない。だがそれはアルフの魔力の1/100にも満たない。

実技試験は彼らが作り出す的に魔法をぶつける。正直なところ身体強化魔法全開状態でその的をぶん殴るつもりだったのだが、この下級精霊達、それはあまり食べられたものじゃない。強力な魔力砲撃。かめはめ波を自分達に撃つてこいと言いつつ出した。

それは某獣王が某ドラゴンの騎士にギガブレイクしてこい。と言っているようなものだった。

そして学園側にかめはめ波を使わせるなど試験監督に伝えそびれた派遣隊員達の落ち度により、前代未聞の事件が起こる。

アルフもまた自分の必殺技(未完成) 甘く見られたと思ったのか全力で撃つことにした。

「全力でやるからな！避けたら後ろの校舎がぶっ飛ぶぞ!!」

「「「考えやがったなちくしょう!」」」

実のところこのアルフのかめはめ波が人工物に当たるとどうなるか定かではない。しかも精霊は初めてだ。

だが精霊達は直感でわかっていた。

「かゝめゝはゝめゝ」

あれは味方だ！受け止めろ！と、

「波ーっ!!」

「学園長！うちの下級精霊達が一時的に中級精霊に進化しました！」

「何がどうしてそうなった?!」

答えは試験会場で零れたアルフの涙が知っている。

第七話 猪の丸焼きゴブリンのミンチを添えて

アルフが放ったかめはめ波を受けて、フレイム中等部学園の下級精霊達が中級精霊に一時的に進化した。その時間、僅か30分という短さだが、下級精霊が中級精霊にランクアップするにはなんと五十年かかる。それも精霊自身もランクアップするため様々な事を経験し、純粋な魔力の摂取をしていかなければならない。

だがその時間に見合うメリツトもある。

仮契約した魔法使いが放つ魔法の力を10とした場合、下級精霊との本契約が50。中級が200。大精霊となると1000以上にもなる言われる。その為、学園長及び試験監督からかめはめ波は絶対に撃つなど注意されることになったアルフ。コレツトにもこの事は誰にも言わないように箝口令がしかれた。

一時的にとはいえ自分達の持つ軍事力が4倍以上に膨れ上がると軍や戦争好きな貴族に知られればなにがなんでもアルフを手に入れようとするだろう。しかもそれは人間に限ったことではない。

人に協力的な精霊がいれば人に敵意を持つ精霊もいる。それは決まって人に近い姿を持った中級精霊以上の存在だ。

精霊は中級精霊以上にランクアップすると人間とほぼ変わらないほどの大きさに成長する。そしてその精霊達の容姿は美形と言われても遜色ないほどだ。その為、下衆な命令をされる精霊が反旗を翻し人間に牙を剥く。

純粋な彼等だからこそ誠意には誠意で。悪意には悪意で返す。

アルフのかめはめ波を受けた下級精霊達も30分だけとはいえアイドル・美人女優と言われても顔かざるを得ない容姿に変貌した。

火の精霊は紅の髪を腰まで伸ばし、同じ色のドレスを着た美女に。

水精霊はおっとりした貴族の令嬢を彷彿させる白いワンピースをつけた美少女に。

土精霊は目付きが鋭いグラマラスボディの特効服を着たレディースに。

風精霊は眼鏡をつけた敏腕秘書然とした知的美人に。

そんな美女・美少女に（かめはめ波を）もつともつとちようだいと頬を赤く染めた精霊達にせめられたアルフの鼻が伸びそうになったがコレットの無機質且つ冷たい視線で我に返ったアルフは慌てて姿勢を正した。

その後、コレットの魔法試験も無事に終えて二人は男子寮、女子寮に割り振られた部屋へと戻り、直ぐに寮長へアルバイトの許可をもらいに行くことにした。

寮では在校生は衣食住はある程度保証されているが、食べる量も決められており、その量ではアルフの体調を支えることが出来ないからだ。

強力な魔法を使うには結構なエネルギーがいる。それはかめはめ波を放つアルフも当てはまる。コレットはアルフが行うアルバイトが彼の体調を支えることが出来ない場合手伝うつもりだった。そして、学園長と試験監督。そして派遣隊員達からの意見を取り入れて進められたアルバイトは害獣駆除のアルバイトだった。

とある冒険者達の話である。

その冒険者達は入学生を迎え入れるために王都アポロの周囲にある森や茂みに潜むゴ布林や猪ポイズンバイソンという蛇型の魔物がいたら駆除するように依頼された者達である。駆除とは言っても見かけたら仕留めるといふ巡回任務に近い。さぼってその依頼金だけもらおうとする輩の防止のため、依頼主であるフレイルム中等部学園や他の魔法学園の教員がついて回るのでそううまくは行かない。

それに今の時期。王都アポロの全領土から魔法使いの卵達を迎え入れるためにゴ布林や猪といった害獣。魔物の討伐報酬に多少色がつくのでいつもの依頼よりやる気が出るのだがその日は違った。

森の入り口の前で狩ったばかりの猪をナイフを片手に解体している少年と、解体した肉の一部を布袋に入れながら、焚き火の上で鉄串を指した肉を焼いている少女がいた。森の入り口の前でそんなことをすればその、血の臭いと香ばしい肉の焼ける香りに誘わ

れてゴブリンや狼が襲いかかってくるだろう。現に猪の解体・調理をしている子供達目掛けて一匹のゴブリンが襲いかかろうとしていた。

冒険者達の一人が危ない。と声をあげようとした次の瞬間、猪の解体をしていた少年はナイフを持っていない方の手で猪肋骨部分を身体強化魔法で強化した腕力をもつて引きちぎると襲いかかろうとしていたゴブリンの方に振り向きながら投擲。哀れ、投擲された猪の肋骨の鋭い部分を当てられたゴブリンは襲いかかろうとしていた方向とは逆方向にぶつ飛び悲鳴をあげながら骨で木に打ち付けられて絶命した。

猪の解体をしていた少年。アルフはアルバイトの件を聞いて、まず猪の気配をコレットと共に探索。サーチアンドデストロイ。来た、見た、狩った！の順番で猪を仕留めると、一度森の外で猪の解体。調理を始める。その臭いに誘われた害獣も狩る。という《釣り》をおこなっていたのだ。

よく見ると彼らの回りにはその《釣り》に引き寄せられた哀れな被害者（害獣）達の骸が転がっていた。

冒険者達にも猪肉の串焼きをくれたコレットが害獣達の討伐部位をすべて回収するときにこやかにアルフごと水に流してそこであった惨状をなかつたことにしていたのを見たのが一番怖かったと冒険者達は語っていた。

第八話 　　ただし、尻から刺さる

フレイム中等部学園の生徒募集の最終日。

その日に学園の門を潜るのは王族や上級貴族といったエリート集団である。

彼等は前もって各自での魔法学習を修めたいわば経験者。だからこそ学園内にあるグラウンドに設置された練習場で自主的に魔法の練習をする他の生徒達を見てこう思う。ああ、あれは自分もやったな。と懐かしむ者や優越感に浸るものもいる。

そんな中、風の中級クラス魔法を扱う少女。フィロ・ウイグロードは前者に当たる。そんな彼女はグラウンドの中で異質な風を感じた。ちょうど試験も終わり、暇を持て余していたのでその違和感の正体を見るために足を運ぶとそこにはロープで区切られたグラウンドの一角に数本の槍がほぼ水平に突き刺さっていた。そこに勢いよく、文字どおり飛び込んできた同世代の少年の姿があった。

その少年は悔しそうに突き刺さっていた数本の槍を引き抜くと飛んできた方向に向かって勢いよく投げると「びよっ！」と変な声を出しながら投げた槍を追いかけるように飛び出した。

この一連の動作にはすべて身体強化の魔法が使われている。フィロは遠目にだが少

年が投げた槍と少年がほぼ同時に地面に着地したのが見えた。

少年はまた投げた槍を回収すると先ほど同じように投げて「びよっ!」という奇声を上げて飛び出した。その距離は100メートルほどだが少年と少年の投げた槍は風を切り裂きながら空に舞う。

フィロは異質な風の正体が少年と投げた槍の風切り音だと気付いた。だが、この少年は何がしたいのかわからなかった。だが、少年が再び此方の方に飛び込んできた時には少年の着地した場所。足の裏には投げた槍があった。少年はフィロには気づいていないようだが嬉しそうな顔をしていた。そして槍を回収、投げて自分も飛ぶ。そしてついに少年は空中で投げた槍の上に乗ることに成功した。その嬉しそうな表情をしていた。

フィロはそれを見て確信する。彼は空を飛びたかったのだ。風の魔法を扱う者として分かる。空を自由に飛ぶ。その憧れ、感動は今でも鮮明に思い出せる。

彼は風の魔法の適正が無かったのだろう。だから身体強化の魔法で槍を投げてその上に乗る、疑似体験をしたのだろう。

そう考えているとまた少年は槍を投げて自分も飛んだ。

しかし、身体強化の魔法の配分を間違えたのか槍を飛び越して先に地面に着地する。それを追うように槍が少年の尻に目掛けて飛んでいき、

「アッーーーーー!!?」

フィロはもし彼がクラスメイトになったのなら優しく接しようと思った。

第九話 大英雄の背中を見ることが出来ない

「まずはこのフレイム中等学園に入学おめでとう。諸君の入学を心より歓迎する」

王都アポロの中心から南側に離れたフレイム中等部の入学式が行われていた。

アポロ王国の庇護下にある町や村から魔法使いの才能を見出だされた少年少女達を迎え入れるのは学園長並びに教師と一部の貴族や豪商達といった有力者達。彼等から認められれば将来は約束されたに近い存在になれること知っているのは彼らの子供とそれに近い者達だけである。

「この学園は立派な魔法使いの育成に力を注いでいるが、それだけではなく人と人との繋がりも大事にしている。諸君らは明日から振り分けられたクラスで学んでいくがあまり仲違いの無いようにするよう。あいつは別のクラスだからとか、別の系統の魔法使いだからとそんなつまらないことで喧嘩などはしないようにしてもらいたい」

学園長がこのような事を言うのには、過去にそのような差別をしたせいで傷害事件に発達したケースがあったからだ。そのせいで優秀な魔法使いの芽を潰すのはあまりにもつたいないからだ。そしてこれは欠伸を堪えているアルフに向けた言葉でもある。

害獣や下級モンスターを殴殺出来る彼が暴れたらとんでもないことになるだろう。

アルフが振り分けられたクラスは無属性の魔法使いの集まりで、コレットが振り分けられたクラスは水属性の集まりという振り分け。

各属性にクラス分けされているが、火属性が主流のアポロ王国ではその風土のせいか、火属性の仮契約をした子供が多い。そしてフレイム中等部の名に相応しく火属性は生徒の数が多く2クラスあるが精霊と契約する機会に恵まれなかった子どもが多いので3クラス。

土、水、風が一つずつに、火が2クラス。無が3クラスの計8クラス。1クラスに付き約20名の計163人の子供達が今をもって正式にフレイム中等部に入学する。

「それでは諸君の進む道に栄光があることを祈っている。改めて言おう。入学おめでとう」

こうしてつつがなくアルフ達は入学を終えた。

「明日から学園生活だね。あゝ、何か緊張するな。アルフはどう思う？」

入学式が終わり、配られた時間割り表をアルフとお互いに見せあいながらコレットは学園から少し離れた喫茶店でジュースを飲みながら明日からの学園生活に想いを馳せる。

アルマーニの村長の娘とはいえ、所詮田舎村の娘でしかない彼女にとってこの喫茶店のジューズも本来なら物怖じする値段だったが、そこはアルフと共に害獣や下級モンスター討伐で稼いだお金がある。入学祝いというつもりで頼んだジューズは納得のいく味だった。

「俺は無属性の強化術とモンスター講座が楽しみ」

そう言いながらコレットよりも少し安いジューズを啜るアルフはこれからの学園生活を楽しみにしていた。

無属性魔法は魔力が扱える人間なら誰でも出来るため応用性が高い。が、精霊と仮契約している魔法使いの魔法に比べ格段に威力が劣る。そのため無属性の魔法使いは脳筋とも荷物係とも揶揄される。だがアルフの場合それを補う、いや、身体能力と強化魔法だけで仮契約。下手すれば本契約した魔法使いをも凌駕するかもしれない。

「これ以上鍛えたら筋肉馬鹿になっちゃうよ?」

「これでも足りないと思うんだけどな」

一体彼は何を目指しているのか。と問えば世界最強の英雄と答えられた。それはこの国の英雄アポロかそれとも他国の英雄ヘクレスなのか?その実、世界最強どころか宇宙最強の英雄だと知ればコレットは何を思うだろうか?

そんな英雄を目指しているアルフだが最近伸び悩みを感じていた。

大英雄に近づこうとするほど遠ざかる。英雄の足下どころか影すら拝めない。年齢を重ねれば重ねるほど倍々に距離が離される。そこでふと思いついた大英雄の技の一つ。

それは強化魔法を覚えて暫く経った時の事。調子に乗っていた自分は英雄のある技を真似ようとして、森の中で試した結果、足をくじいて転がっていき、岩に頭を強打、血塗れで帰宅、コレット及び村人の悲鳴を上げる、アルフはそれから訓練する時は周囲の確認をしてから訓練に入る、少しだけ大人しくもとい自重するようになる。

強化魔法はあくまでも強化であり自身すらも傷つける力は発揮しない。だが、かの大英雄はそんなリスクすら背負つても戦う。その姿は正に男の中の男。自分の中にある前世の中で自分の事すら忘れたのにこびりついたその存在を忘れはしない。

だが、あの頃よりも体も鍛えたし、不本意ながらもかめはめ波（回復）を習得したし、たと言うアルフは訓練に付き合つて欲しいと言いつつ。この調子だと例え止めても一人ですべて試してしまうだろう。

「もうっ、言つても聞かないんでしょ、いーよ、手伝つてあげる」

「はは、ごめんな」

この幼馴染は言い出したら聞かない。初めて猪を素手で仕留めた時もそうだったのだ。まさかわずか9歳が大の大人でも苦戦する猪を仕留めるとは思わなかったがそ

の時も大怪我をしてプチヒールをかけてもらった。

せつかくのジュースもこれでは堪能出来なくなつたコレットは、次来た時にはアルフが全額持ちでこのジュースを奢るようと約束させて、ジュースの代金を払い、店をあとにする。アルフもそれに続いて勘定を済ませてコレットについていく。

そんな二人が行き着いた場所は女子寮の中庭。ここなら万が一があつても寮の医務官がすぐに手当てしてくれる。またアルフが血塗れになつても対処出来るだろう。

女子寮の前まで来た二人は女子寮の中庭を貸してもらおう事にした。

女子寮の生徒たちは入学式のあつたその日にやつて来た男に戸惑いを隠せない。そんな視線に気づいていないのか鈍いのか気が付かない。なぜならアルフの英雄に近付くために無茶をする。先程の頭に岩。だけでなく、村の周りを泥まみれなのにスキップしながら周回、ハチの巣をつついて体中を腫れあがらせ、畑を素手で開墾している間に肥溜めに落ちる。等という奇怪な行動をして住んでいた村人からそんな目線で見られていた事がある為にそんな視線になれたのだろう。

「よしっ、じゃあやるかっ。ぜああああああああああっ！」

コレットから十メートルほど離れた所に立つたアルフは魔力を全開にして身体能力を出来るだけ上げる。そしてその場で反復横飛びを行う。反復だけでなく前後にも素早く動く。

動く。駆ける様に早く、風のように速く、風よりも速く。

その動きによってアルフの周りには風が巻き起こる。まるで手を素早く動かしたようにその姿がぶれる。そう、これこそが。この技こそが。

「俺はっ、俺のっ、背中をっ、見るっ！これがっ、残っ、像っ、k『ブチイツ』はあああああんんんっ?!」

肉離れという。

ストレッチもロクに行わず急に激しい動きをすることにより起こる肉体損傷的現象である。ストレッチをしていたのなら素早い動きによって生まれた自分の残像を見ることが出来ただろうに。

こうしてまたしてもその場でのたうちまわるアルフの珍行動の目撃者と出来事が増えることになったのだ。

第十話 賢者サトウの復活

学園生活一日目。

朝起きたら自前の魔法で作った水で体を洗いで着替えたコレットは、寮で出る朝食を取って、寮の玄関で前日に肉離れをしたアルフの面倒を見てくれた寮母さんに挨拶し、寮を出る。その際にアルフとの関係を探ねられ慌てて否定した。他の寮生にも同じように尋ねられ、あたふたするコレットを寮生たちは微笑ましく見ていた。

かくいうアルフはというと、コレットが起きる二時間ほど前に起床。今は穏やかな春の時期とはいえ、殆ど太陽が顔を出すのと同じ時間に起床。早朝の牛乳配達のバイトの帰りにパン屋に立ち寄り焼きたてのパンとバイトのあまりの牛乳を口にしながら寮に戻りシャワーを浴びて寮で出される朝食を食べてからの登校である。この間の移動方法はもちろん己の膝を高く上げたスキップをしながら。コレットが余裕をもって自分のクラスがある教室へ着くのに対してアルフは結構ギリギリに到着する。

スキップしながらの登校で注目を浴びるがアルフは気にしない。むしろ英雄だつてこのようにしていたとおぼろげながらに覚えているのでむしろ気分は上々だ。しかも今日から強化魔法を学べるのだから更にマシマシ。思わず鼻歌だつて出ちやいそいだ。

その途中で田舎もんだとか脳筋だとか同じ男性寮から出てきたひそひそ声が聞こえたが気にしていない。だってその通りだから。由緒正しき学園に何しに来たんだとか農民風情がという声も聞こえたが気にしない。確かに農民だしこの学園に来たのも強化魔法。しいては自分自身の肉体改造が主な目的だ。この学園に来る人達の大半は精霊と契約して立派な魔法使いになる事であり、けっして格闘家・武術家になるわけではない。

ちなみに魔法使いと武術家を比べると断然魔法使いの方が強い。何故ならロングレンジから狙えるから。アルフが夢想している武術家とその仲間たちほど強ければそうはならないが、どうかあれも魔法の一種だと思う。人の体積でその何十倍どころか数千から数万倍もある山や大陸。星をも粉碎するのだから。

陰口は続く。何故ならこのむさくるしい男子寮に最短でも2年。長ければ5年は過ぎなければならぬのにアルフといったらコレットといった可愛い幼馴染に連れられて女子寮まで連れて行ってもらったのだ。非モテや非リアにとってラブコメ的主人公は羨望と嫉妬の対象になるのだから。

あいつもしかしてえ初代国王のアポロと契約した炎の大精霊イフリート様と契約したいなんて考えてないだろうな。とか、そんな事で英雄になれると思っっているんじゃないかといわれても気にしない。元より精霊と契約するつもりはないし国王アポロと

比べるのもおこがましい大英雄になりたいと考えている。まあ、その考え自体おこがましいのだが。

そして、

「どうせ、あいつが目指している奴もそう大した奴じゃねえよ」

と言われても気にしない。

何故なら即座に身体強化魔法を使い、自分の目指している大英雄を馬鹿にした輩を『高い高い10Mバージョン』したのだから。

登校日初日からアルフは悪口を言ったら体を掴まれて10Mの高さまで飛び上がりパイロドライバー（着地の時には地面すれすれで寸止め）するやべー奴だと認識を自分の事を悪く言う輩たちに植え付けるのであった。

石造りの門と教室をくぐり自分の割り振られた机に座る。そこには横長の机に生徒が三人並んで座れるように配置された椅子。そして机の上には魔法の教本と茶色い用紙を十数枚挟んだノートが置かれていた。たった十数枚ということなかれ、この世界では魔法が発達する代わりに科学技術が遅れている。その為十数枚の紙でも高価なものであり貴重品なのだ。トイレの紙すらも未だに動物の皮かボロ布といった具合なのだ。まあ、アルフは勉強よりも実技の方に力を入れたいと考えていたからあまり必要ないかと考えていたが、良く鍛え、よく休み、よく遊び、良く学ぶ。この四段階の修行生活を

変えるわけにはいかない。恐らくこれから学ぶのはアルマーニ村とは比べ物にならないほどの量と質だろう。だがこれくらい越えなければ大英雄に追いつけない。

そう気合を入れ直してアルフは隣の席に座ったクラスメイトとの挨拶もそこそこに勉強に取り組むことにした。

「で、あるからにして、んむ、どこまで話したかの？」

（（おじいちゃん、そこはさっきも話したでしょ））

甘かった。

まさか、自分のクラスを担当する先生があまりに高齢でちよつとあれだった。

クラスメイトの自己紹介を二度もやろうとした時点で気が付くべきだった。このおじいちゃんちよつとボケが入っている。

「え、つまり、魔法とはイメージが大事なんじやが、自分の力量にあった魔法を選択しないと使えない。で、あるからして、自己紹介を」

「おじいちゃん。じゃなかった先生自己紹介は終わりましたから続きを」

こんなやりとりも既に三度目である。

「そうじゃったかな？魔法はイメージであり、自分のレベルより上を使おうとしたら威力や効果が薄まったり変質するのじや。で、あるからにして、俺の名前はサトウーじや」

「そうだね。おじいちゃん」

この先生の名前を忘れる事なんて葉当分ないだろう。少なくとも在学中は忘れられそうにない。

「というわけで魔法という物はイメージが大切なんじや」

（大事な事だから繰り返し返して言っているんですよね？我慢だ。我慢だ俺）

ちなみにアルフはこの先生の真正面の席隣にアインという男子生徒がいるがアルフ同様にストレスをためている様子だ。まあそれはこのクラスにいる生徒全員の気持ちでもある。この何度も忘れるおじいちゃんにどうやって覚えさせてやろうかといライラが募りいつの間にかアルフの右手にはかめはめ波の光がこもっていた。それは片手でも打てますと言う事とそれほどまでにイライラしているという事だ。

「え〜つまり、なんじやったっけ？まずは自己紹介をしてみようかの」

ぷちっ。とキレたアルフだけじゃなく数人の生徒の堪忍袋が。

それはそうだろう。この学園に魔法を学びたい為に幾つもの試験を受けて合格したのに何でおじいちゃんの面倒を見なきやいかんのかと。そしてアルフは誰よりも行動に出た。

「これが俺の自己紹介だポケジジイイイイッ」

1年無属性の2クラスの教室が青白い光で埋め尽くされた。

「大変です。かの賢者サトウが先日痛めた腰の痛みなどなかったように教鞭をとり、滑舌よく喋りながら授業しています」

「まじでかつ?! 一体何があつたというのじゃ…」

数年前国王から認められた賢者サトウだが高齡が仇になり、昨年暮れからボケが始まり今年の学期が終われば退職させようとしたしたが、今の彼は最年少の教師にも劣らぬ活力に満ち溢れ教鞭を振るっていた。そんな中でアルフだけは涙でノートを濡らしていたという。

第十一話 それは閃光のように

学園生活二日目。

初日では座学を中心にした授業が行われ、今日は実技のほうになる。ちなみにまだ魔法が使えない人にも魔力の強弱を測る為の特殊な黒い水晶が準備されている。その大きさは人の頭くらいの大きさだ。

この水晶、魔力を有している量に合わせて真ん中に光が灯る。コレットのようには魔法が使える人間が触れるとその水晶の中心に青い光が映りこむ。アルフのように無属性ならば白い光が灯る。また、この水晶は希少なので三個しかない。その為、一年生は全員試験があつた体育館に集められた。

「コレット君、君は水でランクCか。うん、なかなかいいね」

「ありがとうございます」

「ではその水晶を持って一番得意な魔法を使ってみてください」

「はい。水よ、渦巻き。ウォータートルネード」

学園の中に10以上ある運動場の一角でコレットは村にいた時に自己流の修行で汚れてきたアルフの服や自分の家族の服をよく洗っていた彼女の突き出した手の先から

勢いよく水が飛び出し、地面に落ちることなく直径1メートルのらせん状に渦巻く水球が現れる。

戦場ではこの魔法は直径5メートルで螺旋に蠢く水流もつとスピードがある。それをぶつけければ鎧を着た大の大人が3人吹き飛ばすが、コレットのそれにはそのようなパワーは感じられない。代わりに持久力。魔法がその効果を維持できる時間は長く出力も安定している。

(素の状態でランクC。魔法発動時にC+。持久力もかなり安定している。こちらから見ると魔力総量は100ちよつと。本当にこの子は農民か？貴族、しかも上級とまで言わなくても英才教育を受けた貴族並に魔力の練度が高いぞ)

魔力や魔法も筋肉と同じように使い続ければ鍛えられる

「…下がってよし。次の人、前へ」

次は風のクラス。その中でも貴族のフィロ・ウイグロードの番になると彼女は水晶を保持したまま足先が宙に浮き、5メートルの高さまで飛び上がった。そのまま空中遊泳をした後、元の場所に降りた。ちなみにこの学園の制服はスカートなのだがその点は彼女が穿いているスパッツがパンツの露見を防いでいる。

「以上です」

今までの生徒達は攻撃性の高い魔法を放っていたがコレットやフィロは見た目が地

味に見える。だが、

（さすがウイグロードの家系だ。詠唱無しで中級魔術である空中浮遊をあそこまで使えるとはランクはB。魔力総量も230。やはり彼女のような貴族は別格だな。これで攻撃魔法を放っていたら大変な事になりそうだ）

（次は、・・・ああ、学園長が言っていた彼か）

「あの…、得意魔法を使うなど言われているんですけど」

曰く、治癒魔法が使える。ポケを治せる。植物を促成させる。魔物を強化する。雲すらも突き破る魔法を使う少年アルフ。彼は学園側からかめはめ波の使用を禁じられている。

つい先日はついキレてしまって使ってしまったのだが、彼がやろうとしているのは恐らく身体強化系の魔法だろうが使うと水晶を割ってしまうのではないかと不安になっていたのだろう。

「自分に出来そうな魔法でもいいから使ってみたまえ。もしくは魔力を込めるだけでもいい。でも危険な事はしないように」

そう言ってアルフに魔法を使うように促した教師はアルフの出方を待った。かくいう、アルフの方はというと水晶玉を持ったまま困惑していた。

かめはめ波は駄目だし、かといつて残像拳（未完成）をやるにも。というかあれは魔

法じやなくて体術だ、かといつて魔法。それに似た英雄たちの技と言えば……。あれかな？

アルフは水晶を持ったままの手を自分の頭の横まで持ち上げる。持っていない方の手も使つてまるで手の平で顔を隠している構えに入る。

「やるぞつ、太、陽、拳！」

これは自分だけが知っている英雄たちの使つていた技。そしてこの技は英雄の相棒がよく使つていた技だ。この技は体から強烈な光を発射し相手の視界を奪う技だ。

ただし使つていたというその相棒は地球人最強の異名を持ち、幼き頃から仙人の下で修業を重ね、果ては神と呼ばれる存在から師事を受けてきた武術の天才。そんな彼の真似をしてただで済むはずがない。

魔法にはフィードバックがある。イメージがしっかりしていても不相应の魔法を使えば上手く発動しない上に魔力をこつそりもっていかれる。

アルフの体から強力な光が発せられ、その場にいた教師・生徒たちの目をつぶらせる。それだけではなく辺りを埋め尽くす閃光が迸り、まるで彼の言つたようにもう一つの太陽が生まれたかのようにだった。

そしてその太陽は2、3秒もしないうちにその光を失う。その光が消えた先にいたのはその場で崩れ落ちたアルフの姿だった。

「・・・燃え尽きたぜ。・・・真っ白にな」
不相応の魔法を使った人間の姿がそこにあつたのだつた。

第十二話 赤く染まった校庭。

アルフが太陽拳の失敗から三日ほど過ぎた頃。

アルフは校庭の真ん中で担任教師であるサトウの元でマンツーマンの居残り授業を受けていた。その前にサトウはかめはめ波（回復）を受けていた。そのお蔭で居残り授業は順調に進んでいた。

「君の魔法は詠唱をした方がいいと思うんだがね」

「詠唱ですか？」

この頃ボケ始めていたため自分を頼る生徒がいなくなっていたためサトウもイキイキとアルフの為に教鞭をとる。

「詠唱とはその術者のイメージを明確にしている。初級である『ボール』系の魔法もその言葉からイメージがつきやすい。己の魔力を球体にしやすくする。次に流れよ。轟け。飛べ。と命令することでその魔法に動きを持たせる。一見回りくどい真似かもしれないがそうする事でイメージが明確になり魔力のロスも抑えられる。これはこの学園に来る前の生徒達が気づかないうちにやっている」

ふむふむと頷きながらアルフは以前やった太陽拳の事を尋ねてみた。そもそも自分

の憧れた英雄達は詠唱などしない。気合一つでその技を繰り出せた。ある意味魔法とはかけ離れた物だ。だが、敢えてそれに詠唱を加えてやってみる。

「日輪の力を借りて！」

無敵な鋼の快男子の爽やかボイスが似合いそうな詠唱である。

「誰よりも輝け！」

違う英雄の技が出そうな詠唱である。

「太陽拳！」

「ぎゃああああっ！目がっ、目があああああっ！」

ビカツ！とアルフの顔から凄まじい威力の光が迸った。その為、その目の前にいたサトウ。そして魔法の術者であるアルフの目を光で潰した。それからしばらくの間のたうちまわった後、肩で息をしながらその後色々議論した。

「ど、どうやら君は自己強化型の魔法に特化しているようだ」

「自己強化って？」

「いわゆる無属性魔法だ。火属性ならその拳に火を纏ったヒートナツクル。水なら氷を纏ったアイスナツクルなどが使えるが君はまだ未契約だったね。というかそれしか出来ないからね。むしろ火属性に属する『ライト』が契約なしで出来るんだ。むしろそっちが異常だ」

つまり、残像拳といった体を基本とした技の再現しか出来ないという事だ。じゃあかめはめ波。回復するという逆効果とはいえ使う事が出来るのはどうしてかと聞いたらいメージが完璧すぎるという点もあるが、未だに分からない所がある。

かめはめ波を使った後は少しお腹が減るのだがそれはどうなのか？ もしや自分の持つ熱量（カロリー）を燃やすことを強化してそれを放っているのではないかと論議を重ねるが答えは出ない。

そうこうしていると日も落ちてきたのもうそろそろ切り上げようとしたサトウーに待ったをかける。強化系に特化しているのなら試してみたい技を一つ思い出した。それを試したい。

サトウーは先程の失敗を繰り返さないように離れる。かつどのような魔法（技）をイメージしているのかと聞いてみたら、それは身体強化の延長だという。

アルフは中腰になり、魔力を全開で解放。ここまではコレットと共に試した残像拳と同じ。だが、試すのはここからが本番。

「赤く燃え上がれ！」

アルフの体から溢れ出す魔力に赤が混ざる。それは燃え上がる太陽の日のように。赤く力強い赤。

「限界を極めし王の拳！」

その技は彼の英雄が死から蘇る際に修得した王の技法。

「界！」

迫りくる巨大な悪を迎え撃つ拳。

「王！」

その技の名は……。

びゅろろろろろろ。

3分後。

全身を自分の血で赤黒く染め上げたアルフがサトウの手によって保健室に運ばれた。

「アルマ先生！急患です！全身の穴と言う穴から血が噴き出してっ！」

「それは大変。つて、また君ですか！」

あの英雄だつて高重力と言う環境で修業してやつとの思いで修得。しかも使った後には全身筋肉痛で動けなくなるくらいに激痛に襲われたというのに、体を鍛えているとはいえ武闘家でもない少年のアルフが再現しようとしたら当然、不相応の報いとしてそのフィードバックとして全身から血が噴き出る症状にアルフは襲われた。というか

使った時点で体のはじけ飛ばないだけ温情である。これが魔法と技術の差かもしれない。

一週間のうちに二回も利用することになった血塗れのアルフ。保健医を務めているアルマに顔と名前を覚えられてしまう瞬間であった。

第十三話 出すなと言われたものほど出したくなる。

アルフが人間ポンプ（全身）をしてから一週間。

フレイム中等学園に来て全新入生が受ける最初の合同授業がアルフとコレット達に迫っていた。

全身から血を噴きだした自分を癒し、一週間で復帰させた水魔法と土魔法の回復魔法って凄い。と改めて魔法の存在に感謝するアルフ。

そんなアルフは淡々と、コレットは少し息を荒げながら授業中にとある行動をしていた。

「あ、アルフ。わ、私、もう」

「久しぶりだからなあ。もう少し体から力を抜いたほうがいいぞ」

「はあ、ふう。まだまだあ」

「あんまり無理するなよ。後は俺がやるから」

13、14になったばかりの少年少女の頬を赤らめながら昼前。しかも学園内で息を荒げながら少女は顔を俯けながら、少年は前を向きながら汗を流していた。

コレットはアルフの無茶にしばしばつきあう事もあつてか、このような事に接するこ

ともあるが本格的につきあうのは今日が初めてなのかもしれない。

汗でびちよびちよになった体操服を更に着崩しながらも彼女達は動き続けた。別の合同授業の日。

ああああああああああつ！

早朝、フレイム中等学園の一角で一人の少年の声が響いた。

幸い、早朝と言う事もあって学園に存在する風の精霊達はその声をかき消す魔法を使っていたのでその声で目を覚ます者はいなかった。

またとある授業中。この日も合同授業で巡り合った二人の生徒を紹介しよう。

フィロ・ウイグロードは貴族である。

それも他国から留学生と言う事。他国からの看板を背負っている身としてそうそうに根を上げることが出来なかった。

だからこそ気丈にふるまっていた。今自分に振りかかっている苦難に耐えていた。だが、自分は貴族なのだ。平民であり、自分達が守るべき存在達の前で弱みを見せるわけにはいかない。自分は彼等の先頭に立っていなければならない人間だから。

「はっ、はっ、はっ」

「・・・大丈夫？」

そんな彼女は苦しそうにその整った顔を苦痛で歪めていた。

フィロの内情を全然知らないがすぐ近くに居るアルフはつい声をかけてしまった。

いかに貴族であろうと王族だろうと平民だろうと奴隷だろうと学園にいる間は平等に扱われる。慣れない環境で慣れない行動についてい苦痛の表情をしてしまったフィロ、今の状況。周りの人達に比べてハイペース気味の彼女の行動が心配になったアルフは声をかけたのだった。

「はっ、はっ、はっ。大丈夫、です」

「いや、でも。…きついでしょ。慣れていないと。それに初めてでしょ」

確かにフィロにとって初めての体験だ。その証拠に彼女の体には初めての証だろうか、とある部分が赤く滲んでいた。

「そう、いう、貴方は、余裕、そう、です、ね」

「まあ、俺は村で慣れていたからなあ」

フィロの佇まいから平民ではないだろう気配は感じる物があつたがある意味純粹培養されていたお嬢様にこれは酷だろうと思ひ、アルフは声をかけた。だが、貴族としてのプライドがそれを断つた。

自分は平気だ。まだやれると。だから気にせず先にいってと言つた。

辛そうにしているフィロはきつとトップに立たなければという気概を感じていたからこそアルフは断りを入れてから一気にペースを上げた。

正直な所フィロは限界だったがアルフはまだまだ余裕を持っていた。だからこそ自分はこんなところで果てるわけにはいかない。いけないのに、体が言う事を聞かない。既に彼女の体は限界だから。

いけないで、私より先にいけないでと心の中で叫んだ。だけどそんな声は彼には届かなくて・・・。

そしてフィロは自分より先にいくアルフの姿を見ながら全身から力が抜けていくのを感じた。

また別の合同授業の日。

あ———っ！

早朝。とある少年の雄叫びが土精霊の作り上げた分厚い土壁にぶち当たり、その内部で反響した。その分厚い壁の中からすつきりした顔を少年と少々渋い顔をした学園長（♂）が現れたがその事はその二人とごく一部の人間。そして精霊達しか知らない事だった。

そんな事を知ってか知らずか、アルフ達が王都アポロに初めてやって来た時にいざこざを起こした坊ちゃん貴族。ポロン・コロナは合同授業の時間。仰向けになってその明らかに運動不足な体を上下させて呼吸をしていた。

「ふっ、ふっ、ふっ、ぶふっ」

玉のようにあふれ出る汗は彼の全身からあふれ出てその丸みを伝わって地面に落ちる。

何故自分がこんな事をしているのか、自分は貴族だどうして自分が無様を晒している。自分は英雄アポロの血統を引く人間だ。こんな風に体を激しく動かす真似はしなくてもいい。それは自分が指示した人間がすることだ。

「おーい、出すなら出すって言ってくれよ」

「だ、黙れ。平民は、黙って、僕、に従え、ば」

そんなポロンに声をかけるアルフはとある作業を中断して声をかけた。

正直に言うとはポロンの事は王都アポロに来た時の印象が強いからあまり気が乗らない。しかし、今の状況は自分に好ましい時間と作業である。

アルフにとつて座学はモンスター講座と無属性の講座しか興味がない。しかし無属性でも他の属性を知ることとで色々対処できるといふ事から火や水。土と風の魔法も座学で習っているが、こうやって体を動かす作業の方が好きなのはアルマーニ村から出る前とほぼ変わっていないのだ。興味のないものほど身につかないので時々補習を受けるのもアルフらしいと言えららしい。

「.....」

ポロンに言われたとおりに黙ってアルフは作業に移る。まあ相手は貴族だ、貴族の言う事を一つくらいは聞いていた方がいいだろう。

「お、おい。急に、うご、くな」

だが、二つも聞くつもりはない。アルフはポロンを無視してペースを上げる。

「だ、だめ、ら。そんなに、はげ、しくし、たら、で、でるうっ」

いつそ出したほうが静かになるだろう。アルフはさらにペースを上げた。

それにポロンは耐えることは出来なかった。

「はっ、はっ、はあっ、うっ?!」

ポロンはたまらず堪えていたものを出してしまった。

その日の放課後。

学園長とサトウに学園長室に呼ばれたアルフは何かしてしまったかのかとそわそわしていると、呆れた風のため息をつきながらサトウに今日の合同授業の内容を知らされた。

その内容は、生徒たちの体力増強のための強化マラソン。両手両足に重り付き。

「お前本当に何なの？初回はいいとして、二回目から冗談で言ったにもかかわらず周回遅れの生徒を背負って走れとは確かに他の先生は言ったよ。だけどお前も重りをつ

けて走っていたよね。しかも一人じゃなくて三人も担いでいたよね。魔力そんなに余ってるの」

「いや、サトウ先生も見ていたでしょ。二回目から俺全力全開で魔法撃ちましたよね。それに魔法なんて使っていないですよ」

「お主、体力お化けじゃのー」

アルマーニ村にいる頃から自前の重りをつけて村の周りや近くの森を走り回っていたアルフにとつて今回の強化マラソンはともなじみのあるものだった。コレットのような村娘でもアルフの無茶に付き合わされている者なら多少は体力もついているので今回のマラソンも耐えられる。

しかし重石をつけて走る事などしたことのないフィロはその重りが擦れて両手首両足首が擦れて血が滲んだ。ポロンなんかアルフに周回遅れる二周目あたりから動けなくなり、後にアルフの運ぶ三段餅ならぬ三段人間の一番下になり、過剰の疲労と背負われて運ばれた衝撃で吐いてしまった。

しかも強化魔法を使われないように学園長が特例で全力の魔法。かめはめ波を早朝に撃たせて魔法を使わせないようにしたのだが、素の身体能力でこなしたアルフに頭を抱える。

「はー、次から魔力を吸って重さが増す枷でもつけますかね」

「そんなのがあるんですかっ」

「嬉しそうにするでない。それは本来戦犯奴隷につけて反抗できなくするようにする物じゃ。そうそうに手に入れるなど難しいぞい」

「ここ30年、大きな戦争はこの国も起こってない。その為その奴隷もつけられる枷も需要が無い。その為数は圧倒的に少ない。」

「そうですか…」

「落ち込むでない。お主、奴隷になりたいんかい。…まあ、今日のところは帰ってよいぞ。今回呼んだのは体力だけではなく魔力の方にも力を込めろと言う事だけじゃ」

とぼとぼと寮に帰るアルフの背中を見送った後、二人の教育者は再びため息をついた。

「…まあ、魔力を吸わせても大して変わらないんでしょうけどね」

「魔力数値たったの5。魔法の使えない赤子並の魔力しかないのになんであんな強力な（回復）魔法がぶっぱなせるんじやい」

先日行われた水晶を用いた魔力の量を測った日。アルフが太陽拳で自爆した時に出た数値はたったの5。まさに赤子並の魔力しかなかった。それなのに回復とはいえずうして雲を突き抜けるほどの魔法が撃てたのかと頭を悩ます二人だった。

だが、二人は忘れている。技術や技法だけでは再現できない法則。それが魔法だとい

う事を。血筋や環境だけでは説明がつかない現象だから魔法。

もし、アルフのかめはめ波を説明するのならそれは。

魔力と同様に生きとし生きるもの全てが持つ命の力。いわゆる『気』と呼ばれる生体エネルギーの発露ということであつたので説明がつかぬ事を今はまだ誰も知らなかつたのであつた。